

大学経営政策研究

第5号（2015年3月発行）：49-63

20世紀前半におけるハーバード大学のカリキュラムの変遷 — 自由選択科目制から集中-配分方式へ —

福 留 東 士

20世紀前半におけるハーバード大学のカリキュラムの変遷

— 自由選択科目制から集中-配分方式へ —

福留東土*

The Change of Undergraduate Curriculum at Harvard University in the Early Twentieth Century: From “Free Electives” to “Concentration and Distribution”

Hideto FUKUDOME

Abstract

This article discusses the change in the undergraduate curriculum at Harvard University in the early twentieth century. In the late nineteenth century, President Charles W. Eliot introduced the students' free electives system that encouraged students to choose courses as per their interests and study plans. At that time, this system had great influence over other American colleges and universities. Moreover, this system aided the establishment of several new academic fields in Harvard and transformed it to a “university” in the true sense of the word. However, Eliot's free elective system was quite radical compared with other forms of elective curricula. Eliot served for forty years, and Harvard changed its direction after his retirement. A. Lawrence Lowell, Eliot's successor, adopted a curriculum called “concentration and distribution.” Eliot's elective system has been widely known, and Lowell's reform has been discussed in a few studies. This article discusses the transition process from Eliot's “free elective system” to Lowell's “concentration and distribution” system on the basis of original Harvard records and provides an outlook for future researches.

1. はじめに

小論は、20世紀前半におけるハーバード大学（Harvard University）を取り上げて、その学士課程カリキュラムの変遷について検討するものである。この時期のハーバード大学を取り上げるのは、この時期、同大学において学士課程カリキュラムを巡る大きな変遷が起こったからである。

*東京大学大学院教育学研究科 准教授

ハーバード大学では、19世紀後半に就任したチャールズ・エリオット（Charles W. Eliot）学長の下で自由選択科目制（free elective system）の導入・強化が進められた。その後、20世紀に入ると、エリオットを継いだローレンス・ローウェル（A. Lawrence Lowell）学長の下で学士課程教育に関する大幅な改革が進められた。カリキュラムについても大幅な改革・修正が加えられ、自由選択科目制に代わって、集中－配分方式（Concentration and Distribution）と呼ばれるカリキュラムが導入された。本稿は、この二つのカリキュラム方式の変遷の経緯を跡付けることによって、学士課程カリキュラムのあり方について考察する材料を提供することを目的とする。

2. 先行研究

エリオットによる自由選択科目制はアメリカ大学史に必出のテーマであり、また、ローウェルによるカリキュラム改革についても多くの先行研究で取り上げられている。本稿では、まず、主要なアメリカ大学通史（ルドルフ 1962=2003；Rudolph 1977；Brubacher & Rudy 1997；Geiger 2015）および、ハーバード大学史家であるサミュエル・モリソンによる業績（Morison 1930, 1936）を用いながら、エリオットおよびローウェル統治下のカリキュラム改革の大きな流れを跡付ける。その後、カリキュラムに関する一次史料であるハーバード大学便覧（The Harvard University Catalogue）を主な手掛かりとしながら、当時のカリキュラムの具体的なあり方について検討を加える。

なお、本稿のテーマについて邦文では、潮木（1994）がエリオットの自由選択科目制について詳しく論じており、一方、集中－配分方式を含めたローウェルの改革については清水（2011）が取り上げている。これらは、いずれも米国の先行研究を下敷きにするものだが、アメリカ大学史の中でどのように学士課程カリキュラムが議論され、展開してきたのかを知る上で、貴重な内容を提供している。ただし、これら研究では自由選択制から集中配分方式への移行過程が検討対象として位置付けられているわけではない。

3. 19世紀後半から20世紀前半にかけてのハーバードのカリキュラム

19世紀後半のハーバードでは、1869年に学長に就任し、1909年まで40年にわたってその地位にあったエリオットによって、自由選択科目制の導入が推し進められた。エリオットによる自由選択科目制は、当時他大学にも大きな影響を及ぼしたとされており、アメリカ大学史において重要な画期をなす出来事と位置付けられている。一方、同制度を巡っては、当時の高等教育界において様々な議論や見解が提起されたこともよく知られている（ルドルフ 1969=2003；Brubacher & Rudy 1997；潮木 1993）。エリオットは、ハーバードにおいて、研究大学院制度の創設・拡充、プロフェッショナル・スクールの改革など、現代に至る大学の教育・研究システムの基本的な構成原理の整備に努め、ハーバードをニューイングランド地方の一カレッジから全米を代表する高等教育機関へと成長させ、ハーバードのいわゆる「ユニバーシティ化」を成功させたと評価される。しかし、そうした中でも学士課程カリキュラムの改革はエリオットの学長就任当初から改革の主眼に位置付けてきたのであり（Eliot 1869）、現代においてもアメリカ大学史において選択科目制度の導入はエリ

オットの名とともに語られる。エリオットは、19世紀後半のアメリカ大学の大規模な変貌期に対応する、いわゆる「偉大な学長の時代」を代表する学長の一人であり、また大学界のみならず、当時のアメリカ教育界に対しても多大な影響力を有した人物であった。自由選択科目制はエリオットの名声とともに語られることが多い。

一方、ハーバードの内部では、1909年のエリオットの学長退任後、すぐに自由選択科目制の改革・修正が進められた。学長としてエリオットを継いだのは同大学政治学教授であり、反エリオット派と見做されていたローウェルであった (Geiger 2015)。ローウェルは、ハーバードで自由選択科目制が進展する中、早い段階から自由の行き過ぎに対する危惧を表明していた (Lowell 1887)。そしてローウェルは、学長就任演説の大部分を学士課程教育の現状分析や改革提言に割いていた (Lowell 1909)。そして就任後、時を移さず、改革の実行に着手したのである。ローウェルの学士課程教育改革は、優等学位制度や学寮制度の見直し・強化や卒業試験、チュートリアルを導入など多岐にわたるものであり、全体としてエリオットによって進められた「自由化」の方向を大きく軌道修正するものであった。そして、そのカリキュラム改革の中心にあったのが集中-配分方式の導入であった。この方式は、学生に、カリキュラムの一部で特定の分野に集中した学習を行わせ、それ以外のカリキュラムでは幅広くさまざまな分野を学ばせるという方式である。科目 (course) に重きが置かれていたそれまでの制度に対して、一連の科目履修を通して分野 (subject) を学ぶことが重視された (Morison 1930)。学生の学習の深さと広さのバランスに配慮したこの方式は、その後のアメリカの学士課程教育において基調を成すカリキュラム形態となった (ロスブラット 1999; Bastedo 2005)。ハーバードにおいてはその後も、現在に至るまで幾度か大きなカリキュラム改革が実施されてきた (ロソフスキー 1990=1992; 今井 2003; 深野 2005, 2008)。その過程では、深さと広さの配分や幅広さの設定の仕方など、さまざまな議論が展開されてきたが、カリキュラム編成の主要な枠組みとしては、ローウェルが導入した集中-配分方式が一貫して維持されている。これと同じような趣旨を持ったカリキュラムは、ローウェル以前にプリンストン大学のウッドロー・ウィルソン学長の下で本格的に導入されたとの指摘があり (Geiger 2015)、また、後にも触れるように、「集中」方式は一般的には「専攻」(major) としてすでに多くの大学で導入されていたとされている (Morison 1930)。そのため、大学史におけるその起源や変遷については別途検討しなければならないが、少なくともハーバードにおいて、その後に続くカリキュラム形態の原型を確立させたのはローウェルの統治下においてであったといえる。

一方、エリオットは科目選択制の代表的な提唱者として知られており、学生個々人の関心や得意分野に重きを置き、個々の能力や学習進度の違いに応じてカリキュラムを編成する自由を確立した。それは、19世紀中葉まで主流を占めていた古典語や伝統的な三学四科を中心としたカリキュラムへの挑戦という意味合いを持ち、当時の高等教育界にさまざまな論争を惹起した (Brubacher & Rudy 1997; Morison 1936)。最も強力な反対者はイェール大学のノア・ポーター学長であり、また、プリンストン大学長ジェームズ・マコッシュとエリオットの間で交わされた論争はしばしば取り上げられる。自由選択科目制については学内にも多くの反対者がおり、エリオットは長い在任期間の中で漸進的に科目選択の範囲を広げ、教員や理事の支持を獲得していった。また、エリオット

トは高等教育だけでなく、大学への入学基準を巡る議論の中で、高校教育への自由選択制の導入をも提唱・推進した。ハーバード大学史家サミュエル・モリソンは、特にこの点を取り上げて、「エリオットはアメリカの若者から古典の遺産を奪ったという意味において、19世紀における教育上の最大の罪に最も責任を負う人物である」と表現している（Morison 1936）。だが、同じ書物の中でモリソンは、エリオットによる選択科目制の導入全般について次のように述べると同時に、選択科目制が他大学へも広がり、いわば中世における三学四科のような存在となったとも述べている。「将来、その意義が批判されることがあったとしても、アメリカ高等教育において選択制ほど広範に、また深く広がった原理はなかった。エリオットは選択制度の不屈の提唱者であり、ハーバード・カレッジを選択制の実験室にした」。

学生に多くの選択肢を与え、その中から個々人の関心やニーズに応じて科目を選択するという方式は、これもまた、現代まで続く学士課程カリキュラムの基本的考え方のひとつを形成している。だが、ここで明確にしておきたいのは、エリオットが導入したのは「自由」選択科目制である点である。これは、基本原理として、学生がいついかなる科目を履修することを許容する制度であり、学位取得要件としても履修科目数（取得単位数）以外に特段の定めがないことを意味しており、この点で学士課程カリキュラムの編成原理としては特殊な形態である。

アメリカ合衆国のカレッジにおいては、17世紀中盤におけるハーバードの誕生以来、19世紀初頭に至る約1世紀半の間、ラテン語・ギリシャ語と三学四科を主軸とした完全必修カリキュラムが敷かれてきた。伝統的な単一・必修カリキュラムを脱しようとする動きは、1820年代頃から各所で起こっていた。しばしば取り上げられるものとして、1820年代のハーバードにおけるジョージ・ティクナーの選択科目制と能力別クラス導入の試み、1825年にトマス・ジェファソンの主導により設立されたバージニア大学での専門学部制の採用などがある¹。しかし、いずれの改革もその継続性や他大学への影響力という意味では限定的であった。こうした歴史の流れの中で、選択科目制をさらに徹底した形で一貫して実現に移したという意味では、歴史におけるエリオット改革の意義は大きい。

一方、Brubacher & Rudy (1997) は、19世紀後半における選択科目制のあり方をカリキュラムの編成原理に基づいて4つに類型化している。第一は、エリオットのハーバードに代表される自由選択科目制度である。第二は、必修と選択の並存方式であり、コロンビア、プリンストン、イエールなどで導入された。最初の2年間は必修科目中心で、後半の2年間は選択科目を多く配置する方式である。第三は、専攻-副専攻 (major-minor) 方式であり、ミシガン、ウィスコンシンなどの州立大学で多く採用された。通常3年次のはじめに学生が専攻（場合によっては副専攻も）を選択する。そして第四は、グループシステム (group system) と呼ばれるものであり、これは哲学、歴史、自然科学などの専門分野ごとに科目をグループ化した上で、学生にそのグループの科目を中心に履修させる専門教育プログラムであり、1876年に設立されたジョンズホプキンス大学で実施された。こうした類型を通してみると、エリオットの自由選択科目制は、選択科目制の類型のひとつであることが改めて確認できる。

科目選択制はいくつかの意味において、学士課程教育、ひいては大学のあり方に対して大きなイ

ンパクトをもたらした。とりわけ、多くの先行研究が強調するように、近代的・科学的知識を、19世紀後半から勃興しつつあった研究大学へ本格導入する制度的枠組みを提供したという意味において、「ユニバーシティ化」のプロセスにおけるその意義には多大なものがある。ただし本稿では、選択科目制が大学における知識の拡充に果たした役割をいったん脇に置き、選択科目制を、学士課程教育の編成原理のひとつとして位置付けることとしたい。この観点に焦点化してエリオットの自由選択科目制を捉えた場合、その歴史的位置付けはどのようにみえてくるだろうか。

4. エリオット学長時代の自由選択科目制

エリオット学長時代の自由選択科目制について、はじめにその主な展開を跡付けておく。自由選択科目制への移行は、段階を追って徐々に進行していった。選択科目制はエリオットの前任者であるトーマス・ヒル学長の時代にすでに導入が進められていた。エリオット就任の前年度に当たる1868-69年度のカリキュラムは、1年次の履修科目はすべて必修であったが、2～4年次は必修と選択がほぼ半々の割合という状態であった(Morison 1936)。エリオット就任直後の1870-71年度には、それまで大学便覧に学年(class)ごとに履修すべき科目が記載されていたのが、デパートメントごとに科目を配列する方式に変更されている。それはつまり、それまで学年ごとに履修科目がほぼ固まっていたものが、学年によらず選択が可能となる改革の方向性を反映していた。また、それまで科目を表す言葉として“study”が用いられていたのが、これと合わせて“course”という言葉が登場している。現在、アメリカの大学で「科目」を意味する用語として一般的に用いられる“course”がこの頃から用いられるようになったことが窺われる。科目選択制の進展の中で「科目」の持つ独立性が増してきたことの証左であろう²。また、デパートメントごとの科目の配列の中では、ごく単純なものだが、科目番号が振られる科目が一部見られるようになる。いわゆる科目番号制が選択科目制の導入とともにこの頃から導入されたことを窺わせる。1874-75年度には必修科目は1年次のすべての科目と2・3年次の約1/3の科目にまで減少している。その10年後の1884-85年度からは、それまですべて必修であった1年次の履修科目が、そのおよそ半分が選択科目に切り替えられている。2年次以降はごく一部論述による課題が必修とされているだけで残りはすべて選択科目となっている。さらに、その約10年後の1895-96年度には1年次における英語、およびドイツ語またはフランス語を除き、残りはすべて選択科目となった。この年度以降、エリオット学長時代の必修科目には変化が見られず、この時期を以て自由選択科目制がカリキュラム全体にほぼ貫徹したことになる(Harvard University 1870-71~1895-96)。

では、その数年後に当たる1902-03年度の大学便覧に基づき、エリオット時代の自由選択科目制の詳細を確認しておく(Harvard University 1902)。1902-03年度の便覧では、学士課程の修了要件として、原則として16科目(full courses)以上の履修とそれら科目での合格が要求されている³。当時の卒業年限は3～4年であったが、4年間在学するとすれば、1年間で平均して4科目を履修する計算である。カリキュラムにおいて、必修科目として提示されているのは1年次における「修辞および英作文」、「ドイツ語」または「フランス語」のみであり、2～4年次には必修として履修しなければならない科目は示されていない。しかも、上記諸科目は入学時に行われる試験の成績如

何によっては履修を免除されていた。この履修免除が適用される場合、その学生は4年間で必修科目をまったく履修しなくてよいことになる。当時の自由選択科目制がいかに徹底したものであったか、また、エリオットの提唱した「自由」がカリキュラムの形態の上でも実現している様子が窺い知れる。このようなカリキュラムのメリットについて便覧の中では次のように述べられている。「多くの大学で必修となっている科目を学びたい学生は、それに該当する科目を選択することでそうした学習が保証される。一方、すでに学びたい分野を決めている学生、あるいはいくつかの分野に学習を集中させたいと考える学生は、そのためのあらゆる機会を得ることができる」。こうした記述からは、学生の関心や意欲に対応しつつ、各人が理想的なカリキュラムを組む手段として自由選択科目制が意味付けられていたことが窺われる。

しかし、さらに便覧の記述をみると、必修科目がほとんど存在しないからといって、学生の履修に対してまったく制約が課されていなかったわけではなかったことがみえてくる。1年生に対しては履修上の条件がいくつか課されている。便覧には、1年次に履修するのが相応しい科目群が提示されており、以下の諸分野に関する基礎的な科目がリストとして掲げられている。そこでは、ギリシャ語、ラテン語、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語またはスペイン語、歴史、政治学、経済学、哲学、芸術、音楽、数学、工学、物理学、化学、植物学、動物学、地質学・地理学、鉱物学という20分野が挙げられている。これら以外の科目の履修を学生が希望する場合は、履修するに足る能力を有していることを示し、担当教員の許可を得なければならない。すなわち、科目履修の順次性はある程度勘案されていた。また、1年次の学生は、学部長の特別の許可を得た場合を除いて同じ分野で2科目以上を選択することはできないこととされている。また、学生は、科目登録に当たって、一年間に履修を希望する科目を年度はじめにすべて登録するが、一年生と特別学生(special students)は指導教員の承認を得ることが必要とされている。これら諸条件がどの程度の厳格さで運用されていたのかは明らかでないが、こうしたことから、科目選択が完全に学生の自由に任されていたわけではないことが窺われる。また、便覧には科目履修に関わる留意点として、次の記述がみられる。「科目選択に当たっては最大限の注意を払い、十分な助言を受けることが学生に強く求められる。また、入学から卒業まで全体の学習が合理的につながった形で継続していることが強く求められる。一時的な好みに左右され、計画性なく年ごとに科目選択の方針を変えるのではなく、熟考の上で練られた学習計画を一貫して堅持することが有益である」。こうした表現は若干の表現の違いこそみられるものの、自由選択科目制導入の当初から便覧に掲載されている⁴。すなわち、全体としての自由の中で、とりわけ1年次学生に対してはある程度の統制や監視、方向付けが示されていることが読み取れる。

以上、各年度の大学便覧を辿ると、科目選択の自由度が次第に高まっていく様子と、同時に自由選択科目制を運用するに当たっては、ある程度の制約や条件、学生への指導が含まれていた様子が分かってくる。

5. 自由選択科目制に対する批判と見直し

ハーバードで自由選択科目制が進展する一方で、すでに1880年代半ば頃から、教員や理事の間で

自由選択の行き過ぎに対する危惧が次第に表明されるようになってくる。1885-86年度における大学の年次報告書の中でカレッジの学部長クレメント・スミスは自由選択科目制の経験を踏まえ、またその後のさらなる拡大を予測しつつも、これからは教授陣による適切な点検と規制が必要となるだろうという趣旨の報告を残している⁵。また、Morison (1930) によれば同じ時期、学内で「学生の学習 (work)」や「機会に伴う責任 (opportunity with responsibility)」といったことが論じられるようになっていたという。学生たちは概して自由選択科目制を好んだ。それは、学習意欲のある学生には最大限の機会を提供し、また学習に意欲を持たない学生はできるだけ楽をして課外活動など学習以外のことに没頭することが可能な制度だったからである (Morison 1936)。

世紀転換期のハーバードでは、学生の履修・学習実態に関するデータの分析やいくつかの調査が行われた。そのうちのひとつ、当時の学生の履修状況に関するデータが1899-1900年度のハーバード・カレッジのディーンによる年次報告書に掲載された (Briggs 1901)。この報告書は、全体的なトーンとしては、自由科目選択制は概してよく機能していると記述されていた。しかし、その中で部分的に、例えば、入門的な科目以外の科目をほとんど履修していない学生が毎年3割前後おり、年度によっては半数を超えるといったデータが示されていた。また、2年次以降の科目を半分以上、単一のデパートメントで履修している学生は2割前後に過ぎないというデータも掲げられた。すなわち、一部とはいえ、合格が容易な科目を中心に履修する学生、また特定の分野に関する深い学習を行っていない学生が存在するという実態が示唆されたのである。こうした中で、自由選択制を取り巻く学内の空気は徐々に変化し始めていた。エリオットは長い時間を掛けて自由選択制を発展させてきたが、いまやその状態を前提として、自由選択制に対してある程度の修正が不可欠であると強く考える新たな世代の教員がその数を増してきていたのである (Morison 1930)。

続いて、1902年、学士課程教育の質を改善するために教員グループによる委員会を編成することが文理学部教授会で決議された。カレッジのディーンであったブリッグスを含む9名の委員によって教育改善委員会 (Committee on Improving Instruction) が編成された。委員長は次期学長となるローウェル (当時政治学教授) であった。委員会では、当時の学士課程教育の実態を明らかにする上で十分な根拠となる資料が存在しないことが指摘された。そのために教員と学生を対象とする大規模な実態調査が実施され、245名の教員、学生からは1,757の回答を得た⁶。この調査では、大部分の学生は自由選択制の下での自分の科目選択に満足していることが示され、また、各科目での教員と学生の関係も良好であると指摘されていた。一方で報告書の中では、学生の学習時間が、各科目により想定される時間よりはるかに短いとの結果が示された。当時ハーバードでは、1科目につき週6時間の学習が想定されていたが、学生たちの平均学習時間は3.5時間未満であり、さらに大規模講義科目では2.5時間未満であった。しかも、これは成績の良好な学生が多く回答した結果であった。この結果は委員会によって、学生による学習実態がきわめて不十分であると捉えられた。報告書では特に大規模授業の問題に焦点が当てられており、大規模授業は大学運営上必要なものであるとの認識が示される一方で、その問題点と改善の必要性が指摘されている。特に学生数の増加もあって、1880年代以降、200名を超えるような科目が大きく増加し、また同学年の学生のほとんどが履修するような科目が出現していたことが示されていた。また、報告書の中では以下のよ

うな問題点が指摘されている。科目選択が無計画に行われている、簡単な科目 (soft course) が好まれ、科目の内容ではなく開講時間が履修決定の際の優先事項となっている、学生が一度に多くの科目を取り過ぎて科目の水準を上げることが難しい、優等学位 (Honors) が学習のインセンティブになり得ておらず、学習の動機付けを高める必要がある、といった諸点である。Morison (1930) はこの報告書を「科目選択制にとって驚くべき内容」と表現している。もっとも、同時期のハーバードではこれ以外にも調査が実施されており、そこでは科目選択制に関して際立った問題が指摘されていたわけではない (Moore 1903)。また、Morison (1936) も指摘するように、こうした一連の問題の中には、必ずしも自由選択制にその原因が帰せられるべきでないものも含まれていた。一般に、カリキュラムの評価は、いかなる観点に立つかによってその見方が大きく変わる可能性があり、当時の現状把握についても多分に慎重でなければならない。だが、実態としては、報告書による現状の問題点の指摘はハーバードの学士課程教育のあり方にいくつかの重要な変更を呼び起こした。Morison (1930) は主要な変更点として以下を挙げている。(1)合格が容易なことで学生たちに知られていた一部の科目が厳格な内容に改められた、(2)標準を超える多数の科目を履修する場合は授業料を追加徴収することとされた (これにより、一度に多くの科目を履修して早期に卒業する慣例に抑制が加えられた)、(3)優等学位に関する規則が改訂され、特定分野で優れた業績を挙げた学生に優等学位が与えられるようになり、合わせて特定の分野で優れた学習が展開できるよう科目のグループ化が図られるようになった。20世紀に入って徐々に表れてきたこうした動きは次なる展開を予見するかのようなものであった。

6. ローウェル学長時代の集中－配分方式

こうした議論が展開される中、学長がローウェルに替わった後、集中－配分方式がどのような形で導入されたのかを、前節で見た大学便覧から10年後、1912-13年度の便覧に基づいてみてみよう (Harvard University 1912)。

ここでは、学士課程カリキュラムの趣旨が次のように述べられている。「[ハーバードの学士課程カリキュラムは] 教養教育を学ぼうとする者に最大限可能な機会の自由を保証するように設計されている。……学生は、全員が一つの分野でかなりの量の学習を行い、かつそれ以外の科目を十分に幅広く学ぶという原理に従った上で、各人の学習計画を立てることが許されている」。「最大限可能な機会の自由」や「各人の学習計画」といった言葉に、それ以前の自由選択科目制の理念を引き継いでいることが示唆されている。一方、ここでは「集中」と「配分」という二大原則に基づいて科目履修が進められなければならないことも言明されている。

具体的なカリキュラムは次のようである。まず、必修科目として指定されているのは、1年次の「修辞と英作文」、および「ドイツ語」「フランス語」である。いずれも入学時の試験で一定以上の成績で合格していれば履修を免除される。便覧では2年次以降にも、「英語」と、「ドイツ語」または「フランス語」が必修科目として提示されているが、英語は1年次に成績の芳しくなかった学生のみに対するものであり、ドイツ語とフランス語も在学中に口頭試験に合格しなければならないという要件を示したものであって、科目の履修を要求するものではない。ただし、こうした内容を「必

修科目」として提示するやり方は、それ以前とはカリキュラムの基調が変化したことを窺わせる。

「集中」については次のように述べられている。「すべての学生は、単一のデパートメント、あるいは承認された分野において6科目以上を履修しなければならない。後者の場合、4科目以上が単一のデパートメントで提供される科目である必要がある。6科目のうち、1年生用の科目あるいは初歩的な内容の科目は2科目まででなければならない」。学位取得条件は10年前と変わらず16科目の履修・合格とされている。そのため、集中学習はカリキュラムの1/3強を占めることになる。また、学生の学習が初歩的な科目に偏らないよう条件が付されている。

一方、「配分」についてはどうだろうか。「幅広い学習を行うため、学士課程学生が履修可能な科目は以下の4つの分野に大別される。すべての学生は、自分の集中学習を除く3分野で6科目以上を履修しなければならない。また、各分野で必ず1科目以上を履修し、2分野の合計科目数が3科目を下回ってはならない」。4つの分野としては、「言語・文学・芸術・音楽」「自然科学」「歴史・政治学・社会科学」「哲学・数学」が設定されている。「配分」は「集中」と同じ6科目、すなわちカリキュラムの1/3強を占める科目の履修が求められると同時に、適切な幅広さを確保するための条件が付されている⁷。必修科目は集中学習、配分履修のいずれの履修要件にも含まれないこととなり、集中と配分の履修要件を満たす以外に、卒業要件の範囲内で学生が完全に自由に履修できるのは最大で4科目ということになる。カリキュラムの改編により、「自由」選択がかなりの程度抑制されたことが分かる。こうしたカリキュラムの意図についてローウェルは、最初の学長報告書の中で、学生に体系立った教育を保証する科目選択を行わせること、およびカリキュラムを全体として捉えさせ、より真剣な姿勢で計画させることの二つを挙げている (Lowell 1910)。

また、学生の学習に対する管理も強化されている。登録科目の提出に当たっては事前に指導教員の承認が必要とされている。これは10年前にも1年次生に課されていた要件だが、この時期には全学生に対して適用されている。さらに、以下の記述も見られる。「学生は全員、指導教員の助言に従って科目を選択しなければならない。1年次の開講時までには学生は指導教員と面談し、1年次の学習について話し合いを持たなければならない。1年次の終わりには、2年次以降の学習計画を指導教員に提示しなければならない⁸」。

こうして集中－配分方式の具体的な内容を見てくると、学生が自分の学びたい分野や科目を選択するという、自由選択時代の基本的な趣旨は維持させつつも、しかしそれらを学生の「自由」に任せるのではなく、ある程度の条件と制約を課すことで深さと広さを確保しつつ、学生の学習を方向付けようとしていることが見てとれる。

7. おわりに

以上、本稿では、20世紀前半のハーバード大学を取り上げて、カリキュラムの変遷の過程を追ってきた。自由選択科目制から集中－配分方式への移行は大きな転換であったと同時に、後者への移行後も必修科目の設定はきわめて抑えられており、一定の枠組みの中で学生の関心や意欲に即した選択の自由は保証されている。その意味からすれば、両者は相対立するものではなく、極端な選択の自由によって生じた問題を修正する方策として、学生の履修のバランスを重視する中で登場した

のが集中－配分方式であったと位置付けることができるであろう。

すでに述べたように、「集中」は通常の大学では「専攻」と呼ばれることが多いが、ハーバードでは現在でもローウェル時代以来の「集中」(concentration)の用語がカリキュラム要件として残されている。また、「配分」のほうは「一般教育」(General Education Program)へと名称を変え、現在では8つの領域からそれぞれ1科目以上を履修することが要件として課されており、カリキュラムの1/4の比重を占めている⁹。

自由選択制は19世紀後半のアメリカ大学史上、最も大きな転換であったとされており、一方、集中－配分方式は20世紀以降のアメリカの学士課程教育カリキュラムの最も主要な枠組みを提供した。こうした意味からも、これらのカリキュラム形態はより多面的に検討に付されるべき対象であるといえる。本稿の内容を超えて今後検討すべき課題として以下を挙げておく。

まず、これらカリキュラムを支えた理念に関する検討である。エリオットの自由選択制を支えた考え方については、エリオット自身の論考はじめ多くの研究で触れられているが、本稿では取り上げることができなかった。また、ローウェルの集中－配分方式については、管見の限り、その理念上の独自性を指摘する研究はみられないが、この点についてもローウェル以前の事例を含めた検討が必要である。また、ローウェルの時代には、集中－配分方式に加えて、卒業試験やチュートリアル制度の導入、優等学位制度や学寮制度の充実・強化を図るなど、学士課程教育のあり方を強化するための包括的な改革が行われた。本稿では、カリキュラムの形態に着目し、その移行過程についてみてきたが、ローウェルによるハーバード・カレッジの改革の全体像を把握するとともに、集中－配分方式がこれら学士課程教育を支える諸制度との関連においてどのような機能を有したのかについても今後検討が必要である。

こうした観点を加えつつ、それぞれの学士課程カリキュラムの形態にいかなる歴史的意義が与えられるのかについて検討することが今後の課題である。

注

1. ルドルフ (1962=2003) は、ティクナーとエリオットの関連性について次のように述べている。「ティクナーの鋭い問いには、ドイツのユニバーシティの精神が貫通していた。しかし、ハーバードには、まだ大きな変革に取り掛かる準備ができていなかった。それには、ほぼ半世紀後のエリオット学長を待たなければならなかった」。また、エリオットは1883-84年度の学長報告書の中で、「60年前に始まった試みが実質的に実現に移された」と述べており、これはティクナーによる改革のことを指している (Eliot 1885)。ただし、Morison (1936) が指摘するように、ティクナーの意図した改革は一つの分野で一連の科目群を履修させようとするものであり、この意味でエリオットの自由選択科目制とは異なっていた。
2. Morison (1930) によれば、ヒル学長時代にも実態として“course”は存在したが、“course”という明確な名称で呼ばれてはいなかった。
3. 当時のハーバードには“full course”と、1881-82年度から導入された“half course”があった。

- 前者は年間にわたって開講される科目であり、後者は半期の開講科目であった。学位取得要件は、“full course” 16科目に相当する科目履修・合格とされていた (Harvard University 1881)。
4. 例えば、これより30年前の1872-73年度の便覧では、「カレッジで提供されるあらゆる科目が学生に開かれている」と述べられた後で、「科目選択に当たっては最大限の注意を払い、十分な助言を受けることが学生に強く求められる。また、入学から卒業まで全体の学習が合理的につながった形で継続していることが強く求められる」と、30年後とほぼ同趣旨の記述がみられる (Harvard University 1873)。
 5. Smith (1887) は具体的に以下のように述べている。「過去20年間にわたり選択科目制は、カリキュラムのごく一部の割合を占めるところから、現在ではカレッジの科目のほぼすべてに至るまでゆっくりと拡大してきた。この間、教授陣の役割は、その発展を眺め、継続的な発展段階のどこで機が熟するのを見定めることだった。[しかし、] 今後の数年間の我々の課題は、科目選択制を自由な学習に伴う危険から守り、かつその最大の効果が確実に行き渡るように、これまでの経験に照らして、必要な点検と規制を工夫し、実行することである。ここ数年、この目的のための重要な措置が段階的にとられてきた」。
 6. 学生は科目ごとに調査に回答しているため、回答学生数を表わすわけではない。
 7. ただし、配分履修の要件はその後やや後退し、1922-23年度からは4分野で4科目に減らされている。
 8. とはいえ、以上のような諸条件は例外なく厳格に運用されていたわけではないようである。便覧には例外措置に関する次の記述がある。「上記のルールを運用する際、委員会は教授陣と相談しつつ、優秀な学生が1年次に立てた学習計画を後に変更しようとする場合、例外措置を講じる。また、学生が配分履修のルールを厳密には守ってなくても、十分に幅広い学習を行っている優秀な学生である場合、例外措置を認めることができる。ルールの例外措置を講じるに際しては、学生のそれまでの学習状況と科目外での読書状況が考慮される」。
 9. “Harvard College, Graduation Requirements” <http://college.harvard.edu/academics/planning-your-degree/graduation-requirements> (2015年2月21日アクセス)

参考文献

- Bastedo, M. N. (2005). Curriculum in higher education: The historical roots of contemporary issues, In P. G. Altbach et al. (Eds.) *American Higher Education in the Twenty-First Century*, (pp.462-485), Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- Briggs, L. B. R. (1901). The College, in Harvard University (Ed.) *Annual Reports of the President and Treasurer of Harvard College 1899-1900*, (pp.100-124), Cambridge: Published by the University.
- Brubacher, J. S., & Rudy, W. (1997). *Higher Education in Transition: A History of American Colleges and Universities* (4th Edition), Transaction Publishers.

- Committee on Improving Instruction in Harvard College (1904). Report of the Committee on Improving Instruction in Harvard College, cited in Hofstadter, R. & Smith, W. (Eds.) (1961). *American Higher Education: A Documentary History, Volume 2*, (pp. 741-747), Chicago: The University of Chicago Press.
- Eliot, C. W. (1869). Inaugural address as President of Harvard, 1869, cited in Hofstadter, R. & Smith, W. (Eds.) (1961). *American Higher Education: A Documentary History, Volume 2*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Eliot, C. W. (1885). President's report for 1883-84, in Harvard University (Ed.) *Annual Reports of the President and Treasurer of Harvard College 1883-84*, (pp.3-47), Cambridge: Published by the University.
- 深野政之 (2005) 「ハーバードのカリキュラム改革：コア・カリキュラムからカレッジコースへ」『大学教育学会誌』27(1)号、大学教育学会、131-137頁。
- 深野政之 (2008) 「ハーバードのカリキュラム改革—5年間の軌跡」『大学教育学会誌』30(1)号、大学教育学会、96-102頁。
- Geiger, R. L. (2015). *History of American Higher Education*, Princeton: Princeton University Press.
- Harvard University (each academic year). *The Harvard University Catalogue*, Cambridge: Published by the University.
- 今井重孝 (2003) 「ハーバード大学」有本章編『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部、251-263頁。
- Lowell, A. L. (1887). The choice of electives, in Lowell, A. L. (1934). *At War with Academic Traditions in America*, (pp.3-11), Westport: Greenwood Press Publishers.
- Lowell, A. L. (1909). Inaugural address as President of Harvard, in Lowell, A. L. (1934). *At War with Academic Traditions in America*, (pp.3-11), Westport: Greenwood Press Publishers.
- Lowell, A. L. (1910). President's report for 1908-09, in Harvard University (Ed.) *Annual Reports of the President and Treasurer of Harvard College 1908-09*, (pp.5-33), Cambridge: Published by the University.
- Moore, C. S. (1903). The elective system at Harvard, cited in Hofstadter, R. & Smith, W. (Eds.) (1961). *American Higher Education: A Documentary History, Volume 2*, (pp.737-741), Chicago: The University of Chicago Press.
- Morison, S. E. (1930). *The Development of Harvard University since the Inauguration of President Eliot: 1869-1929*. Cambridge: Harvard University Press.
- Morison, S. E. (1936). *Three Centuries of Harvard: 1636-1936*, Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.
- ヘンリー・ロソフスキー (佐藤隆三訳) (1990=1992) 『大学の未来へ—ハーヴァード流大学人マニュアル』TBSブリタニカ。

- シェルダン・ロスブラット（吉田文・杉谷祐美子訳）（1999）『教養教育の系譜—アメリカ高等教育にみる専門主義との葛藤』玉川大学出版部。
- フレデリック・ルドルフ（阿部美哉・阿部温子訳）（1962=2003）『アメリカ大学史』玉川大学出版部。
- Rudolph, F. (1977). *Curriculum: A History of the American Undergraduate Course of Study Since 1636*, San Francisco: Jossey-Bass.
- 清水畏三（2011）『列伝風ハーバードの学長さんたち—成功者と失敗者』私家版。
- Smith, C. L. (1887). The College, in Harvard University (Ed.) *Annual Reports of the President and Treasurer of Harvard College 1885-86*, (pp.25-74), Cambridge: Published by the University.
- 潮木守一（1993）『アメリカの大学』講談社学術文庫。